

第六駆逐隊と廃線跡を辿る男の話

黒廃者

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ゆっくりでいい、それでも歩いて行けるのなら……。

※本作は艦隊これくしょん+αの二次創作です。キャラ崩壊にご注意ください。

また、本作は私が過去に執筆したものを発掘し大幅に加筆修正したものとなっております。

彼女らがそれに関心を持ったのは何日ほど前だったか……。

鎮守府に敷かれた鉄のレールを辿って歩き続けた先に見つけたものの。

今日も第六駆逐隊の暁、響、雷、電の四姉妹はそれを見に裏口のゲート前まで来ている。

鎮守府を囲う、関係者以外立ち入り禁止の札を引つ掛けたフェンスに手の指を掛け、胸の奥から密かに湧き出る好奇心に身を任せて、何も考えずそれをブーツと眺めていた。

「……あれって、何処に続いていると思う?」

三女の雷が、感情のこもっていない声色で呟く。

「雷ちゃん、それ聞くのもう三度目なのです……」

電が苦笑しながら答える。

雷本人とて、姉妹達が分かるつもりで質問しているわけではないのだろう。ただ目視では確認し切れないので、何となく呟いてるだけだと思われる。

再びポケーっと廃線跡を眺め始めた時、響が口を開いた。

「ずっと昔は、鎮守府に物資を届けるのに使われていたみたいだね。トラックが普及して、需要がなくなったらしいよ」

「あら響、よく知ってるわね?」

暁が驚いて声を上げる。

「別に。図書室の本に載っていたのを見つけただけさ」

彼女たちが目になっているものは、どの国にもあつてかつて普及し、次第に忘れられていったものだ。

いわゆる、はいせんあと 廃線跡というやつである。

自動車のない時代は貨物列車が物を運搬し、客車が人を運んでいた。

その名残りは全国至るところに点在し、かつての面影を儂く感じさせてくれる。

第六駆逐隊が所属する鎮守府にも、まだ艦娘も深海棲艦もいなかった頃にはすっかり列車が走っていた。しかし今は錆びた路線だけが緑の雑草の間から見え隠れしているだけだ。

「響、他には何か書いてなかった？」

「残念ながらかなり古い本だったことに加えてこの鎮守府自体の記録が碌になかったせいでこれ以上はさっぱり」

響の返答に、暁と雷は残念そうに肩を落とす。

子供の知的好奇心というのは存外強い。気になるものがあればその全てを識ろうとする。

艦娘の中でも駆逐艦である4人は外見も精神レベルもまだ幼い。故に、鎮守府から外出する機会を得られない彼女たちは外へと繋がる線路に興味を持っていた。

鎮守府から伸びるレールの終着点、そこまでの道のりに広がる景色、すべてが未知の世界。想像するだけで艦娘たちの胸は高鳴る。

強めの潮風が吹き、彼女たちの髪と、廃線跡の雑草が揺れると同時に……。

エキゾーストノートが鎮守府に小さく木霊した。

相良さがら義文よしふみは慣れない田舎にいた。

都会っ子というわけではないが、ド田舎に住んでいたわけでもない。中途半端に都会かぶれな街出身の、どこにでもいる日本の男子学生だ。

シビックEK9という愛車で早1時間、峠を越えてはるばるここまですてきた。

彼は今鎮守府に向かっている。旧友と呼べる男がそこで艦隊を指揮する立場の人間で、突然誘いを受けた。

旧友から送られてきた周辺の地図はお世辞にも解りやすいとは言えず、結局カーナビ頼りだ。

幸い、峠に差し掛かったあたりから鎮守府までは貨物線の廃線跡が伸びており、平らな土地に入ればあとは廃線跡を辿るだけでよかった。

カーナビの音声ルートガイド終了のお知らせを告げ、やがて鎮守府が見えてくる。ここまで来ると、廃線跡は雑草だらけだった。

(……………ん?)

義文は人の姿を視認する。

小さな子供たちがフェンス越しにこちらを見ていた。

(艦娘か……………)

彼の心中に湧いた感想はその一言に尽きた。

ハンドルを右に切ると、義文の関心は薄れていった。

鎮守府裏手より進入し、駐車スペースにEK9をつける。

『杖』を手にし、右足に体重を乗せないよう意識しながら車から降りて周りを見渡すと、明らかに都会と違う空気を吸って、顔をしかめた。

(土っぽくて海水のにおいがする……………)

「土っぽいとか思ってる?」

声がする。義文はそちらを向いた。

真っ白な軍服をきつちり着込んだ端正な面立ちの青年と、青い袴がミニスカートのように丈の短い、弓道着姿の美少女……否、艦娘がいた。

「わざわざ司令官殿自らお出迎えとは、暇か？」

「生憎暇ではない。しかしこちらから呼んでおいて放つたらかしにするわけにもいかないじゃないか。態度が悪いと思われたくはない」

「そんなに外面気にするタイプだったっけ……？」

「よし出迎えはした。私の体裁は守られた。加賀、お客様を客間へ案内してあげなさい。ついでに要件も話しちゃって」

「おい」

呆れる義文と話す男は木ノ本楨人^{きのもともまきと}。彼こそこの鎮守府の提督にして、義文の友人と呼べる人物である。

胡散臭い喋り方と甘いマスクが特徴（義文談）。

しかし最終的に艦娘に全投げするあたり本当に忙しいようで、そそくさと背中を向けて去っていった。

「それでは、私のあとをつけてください」

加賀という艦娘はニコリともせず、機械のように淡々とした口調で指示を出す。

義文は少々の居心地の悪さを感じながらも杖をつき、本来右足に掛けるべき体重をすべて杖に移動させながら進む……。

「緑茶、紅茶、麦茶など一般的な茶葉は揃っています。どれにしますか？」

「……緑茶で」

殺風景な客間のソファに座らされ、加賀という艦娘が紅茶を作り始める。

「……あの、俺は緑茶を頼んだはずですが」

「申し訳ありません。提督から貴方を煮るなり焼くなり好きにしてい

い、むしろやれとの命令を受けておりまして。私なりに嫌敬からせ迎の仕方を模索してみたのですが」

「そんな命令鵜呑みにしないでいいから」

「この後紅茶に砂糖ではなく塩を加える計画がありますが？」

「やめろください」

最初こそロボットののような印象を受けたが、あのキザ野郎の息のかかった部下であることを再認識。

普通の緑茶を入れ直してもらった。物凄く残念そうにため息をついたのが腹立つ。

一息ついて、温かい緑茶の注がれた茶碗をそつと手に取りながら、義文は本題を口にする。

「それで、槇人の用事というのは何なんですか？」

加賀は直立したまま質問に答えた。やはり、表情は動かない。

喉が渴いたので緑茶を口につける。

「至極単純明快ですよ、提督の用件は……」

返ってきた答えは確かに至極単純明快だったが、苦みが強いはずの緑茶に溶け込んだ濃厚な甘味に吐き気を催しそれどころではなかった……。

序章―プロローグ― 杖つきの青年 side 終

鎮守府本館 執務室

「よろしかったのですか提督？」

「ああ、あの男は性格に少々問題はあるが、年下の世話は得意なんだ。彼女達はうちの駆逐艦の中でも特に幼い。第六駆逐隊のみで外出させようなら心配事でいっぱいだ。かといって私や他の艦娘を引っ張り出すのも上にバレれば面倒だ。大学にも行かずに引きこもっているニートには社会復帰の鍛錬になるし丁度いいかと思ってね」

「いえ、その話ではなく砂糖多めに入れて飲ませた緑茶の件です」

「あ、そっち」

「健康に良いかと思いついでに蜂蜜も大量に投入してしまいました」

「私が命令しておいてなんだけど加賀って時々すまし顔でとんでもないことするよね。彼、甘ったるいの苦手だから今頃グロッキーだと思うよ。それから間違ってもお偉いさんにはやめてくれよ？首が飛びかねない」

「提督の首が飛ぶのを想像すると気分が高揚します」

「ははは。その時は君も道連れだから覚悟しとけよ」

執務室での会話は、およそ常人のそれではなかった…。

「……気持ち悪い。何入れやがったんだあの女」

一方、秘書艦特製健康ブレンドの緑茶を無理やり飲んだせいで、義文の足取りは重い。

なんとか愛車まで辿り着くとシートに腰掛けて背もたれを倒す。早く気持ち悪さを取り除きたかった。

幸い回復傾向にあり、少し良くなった義文は加賀から言われたことを思い出す……。

『第六駆逐隊と共に廃線跡を調査せよ』

は？と口から飛び出しそうなのを必死に抑えた。

加賀の言うところ、ここ数日間、第六駆逐隊は度々あの場で廃線跡を眺めているらしい。歳相応の好奇心というものだそうだが、彼女らは艦娘であり、おいそれと外に出すわけにもいかないそうなのだ。

しかし指揮官である木ノ本は、艦娘だつて一人の人間なのだから多少好き勝手やらせてやりたいという気持ちがあるそうで、できる限りの自由を部下に与えているそうで……。

つまるところ、

(俺を保護者代わりにしようというわけか)

義文はフクザツな気持ちになつて、車内の天を仰いだ。

クソつたれ提督様にいい様に使われているわけなのだが、義文自身子供の相手は嫌いではない。加えてここに来るまで見た放置された廃線跡にも、若干の興味があつた。

必要性が失われ、残されたのは、ただ朽ち果てていくだけの長い、とつともなく長い時間。

まるで、空っぽな自分自身の写し鏡を見ているような気分だつた。

そんなことを考えていると、コンコンと誰かが窓を叩いた。

思巡を止め、そちらに視線をやると。

キラキラと瞳を輝かせた4人の少女が義文を覗き込んでいた……。

顔を引きつらせ、恐る恐る窓を開ける。

「暁よ。一人前のレディーとして扱ってよね！」

「響だよ。貴方が司令官のマブダチの人？」

「雷よ！何か困ったら私を頼りなさい！」

「電です。初めまして相良義文さん……なのですよね？」

「……………いかにも、自分が相良です」

開けた途端に四者四葉の自己紹介が元気良く飛び込んできたために耳の穴を小指で塞ぎ、治りかけていた気持ち悪さがぶり返してきたことに苛立ちつつも、なんとか返事を返すことに成功する。

「ねえねえ、ちゃんと連れていつてくれるのよね!？」

「どこに？」

「廃線跡。加賀さんから聞いた」

「ああ、なるほど。君たちが第六駆逐隊か」

はあ……と聞こえないくらい小さくため息を吐き、ドアに張り付く暁と雷を下がらせて車から降りた義文は、何も言わず廃線跡の方へと向かう。

杖をついたぎこちない歩みに、第六駆逐隊は驚きを隠せなかったが、彼女達が何かを言う前に義文は、

「昔、事故っただけだ。気にしないでいい」

吐き捨てるようにそう言うと、4人の表情は少しだけ和らいだ。

彼女達はこの辺りから眺めていたのを思い出し、フェンスの目の前で足を止め、同じように視線を景色へと向けた。

雲が穏やかに流れていく空の下、自分が越えてきた深緑の山が小さく見える。さらに視線を下に向けると、道中にあつた小さな町と、そして錆びたレール。

不思議な感覚だった。

退屈なのか、感動なのか、郷愁なのか……彼は形容しがたい胸の窮屈さに戸惑いながら、潮風に揺られる雑草の中から伸びる錆び付いた線路を見つめる。

「こいつは鎮守府専用の線路で、街から山一つ越えて必要な物資を届けるためのもんだ」

「それはもう知ってるわ」

暁がふんぞり返った。

「私が教えた」

響が付け加える。

「楽しいもんなんてないと思うぞ」

「そんなの、鎮守府を出てみないとわからないことよ！」

雷が反論する。

「私達は見てみたいのです。外に広がっているいろいろなものを」

電は訴えた。

「どうやら、引き下がってはくれないようだ。」

「……まあ、仕方ないか」

好奇心は止められない。

それに、期待させておいてそれを裏切るのも気分が悪い。

性格は酷いものだが、それでも友人の好みで命令に従ってやるとしよう。

観念したように、義文は再びEK9へ戻ると、4人に声をかけた。

「乗りなよ。先を見せてやる」

杖をつく青年と第六駆逐隊の、廃線跡を辿る小さな冒険が始まる。

第1話 廃線跡を辿る者達 終

ちなみに。

「一人前のレディとして暁が助手席に座るわ！」

「ずるいわ！助手席は景色がよく見えるから私が座りたいのに！」

「後ろのシートより落ち着ける……」

「け、喧嘩しちやダメなのです！……ここは公平にじゃんけんで決めるのですー！」

「……早くしてくれ」

「3分間待つてくださいいなのです！」

「時間だ。置いてくぞ」

E K 9の助手席をめぐる仁義無きじゃんけんを制したのは暁。

鎮守府を出てすぐの一本道には田が広がり、廃線は道に沿うように伸びている。

車を走らせて十分と経たずして、彼らを閑静な住宅地が囲い始めた。

否、閑静という表現もどうかというほどに、人の気配はなかった。深海棲艦と戦争するための軍事基地近くなどに好き好んで住み続ける者など、そういないからである。

町の名称は、『花葉町』。

自然に囲われ、かつては第一次産業を中心に栄え、豊かな緑のこの町らしい名前だ。

しかし今はその緑も枯れ落ちて、無機質なシャッターばかり目につく活気のない町中を、相良義文の運転するEK9が進む……。

「うーん……なんだか寂しいわね、鎮守府の周りって」

「もつと人が沢山いるのを想像していたのです……」

後部座席の両端を占領した雷と電が、窓の外を見て残念そうに言葉を漏らした。

義文も、来るときはカーナビばかりに気を取られて気に留めてすらいなかったが、こんなにも寂しいのかと内心呆気にとられていた。

鎮守府の外を詳しく知らない艦娘にとって外出は新たな情報を手に入れることのできる滅多にない機会だ。

これが初めてである彼女たちが外の世界にどのような景色を思い描いているのは想像に難くない。

表情を暗くする雷と電をミラー越しに確認すると、義文は言う。

「しよげるな。山の向こうはもつと、五月蠅い。お前達の思ってるとおりの世界がある。今日は無理だが、いつか連れてってやるよ」

「ほんとに!? 約束よー!」

「楽しみなのです!」

活力を取り戻した声が届き、再びミラーに目をやる。

(……ちゃんとフォローできたようだな)

義文はホツと胸を撫で下ろした。

「ところで、住宅地に差し掛かったあたりから線路が見えなくなつたね?」

すると、今度は後部座席の真ん中に大人しく座っていた響が身を乗り出して義文に話しかけてきた。車内空間の窮屈さで必然的に顔と顔が近くなり、息が耳元に軽く触れる。

そういえば先ほどから廃線は建物の陰に隠れてしまつて見えない。というのも、義文はあえて来たときは異なるルートでEK9を走らせていたからだ。

「なに、建物に隠れてるだけでまたすぐ見える。あと、シートベルトがないとはいえあまり派手に動くなよ。お巡りさんがいないとは限らないんだからな」

「Отказаться」

「意味はまったくわからんが俺の言うことを聞くつもりがないということはなんとなくわかつたよ。少し先の自販機でみんなにジュース奢つてやるがお前だけ水道水な」

「露骨な差別はいけないんだよ。人としてカスだよ」

「お前にだけは言われたくねえよ」

ムスツと頬を膨らませる響と、そんな低レベルのジョークを交わしている、直前まで空を飛ぶ鳥たちを数えていた暁が義文の肩をバシバシと叩いた。

「ねえ、あれ見て！見てったら!!」

余程興奮しているのか、叩く手を止めない。

後部座席の三人も何事かと、なおも義文の肩をバシバシ叩き続ける長女を注視する。

「痛った！見かけによらず痛ったなんつー力だ！ちよ、あぶねえから、やめろ！」

普通の人間と艦娘は姿こそ同質であるが、中身はまるで違う。かつては軍艦として獅子奮迅の健闘をしてみせた彼女たちのパワーはしっかりと人の身となつた今も継承されている。

しかし、そんなことなどつゆにも知らない義文は強烈な衝撃に驚

き、意図せずステアリング操作を誤ったことで、車体が左右に振れ、急停止する。

「うえ!? あ、ご、ごめんなさい……」

そこでようやく気が付いた暁は、怒鳴られると思ったのか目尻に涙を溜めて背中を丸くし、怯えたように謝罪。

その愛玩動物のような姿に義文は抱える必要のない罪悪感を覚え、なんだか怒る気も失せてしまう……もとよりそんなに怒るつもりもなかったのだが。

「ふええほんとにごめんなさい……」

「はい、暁ちゃん。ハンカチ貸してあげるのです」

「別に怒ってないから……エンディングまで泣くんじゃねえぞ」

そもそも叱るの苦手だし、とポツリと付け足したことは誰にも聞かれなかったと信じたい……。

「で、どうしたんだい暁、未確認飛行物体が家畜を攫っていたのかい？」

アフターフォローを姉妹に任せつつ、再び車を発進させる最中、響が事の発端を暁に尋ねた。

「あれよ、あの建物!」

暁はそう言って、人差し指をフロントガラスの方向に突き出した。それは廃線路と同様に、いやそれ以上に人が必要とした場所。

廃れた花葉駅が、ポツリと佇んでいた……。

路線の運行が停止してからずっと放置されていたのだろう。木造の駅舎は至るところに綻びが見られた。

来るときは気が付かなかつたが、どうやら鎮守府への貨物線専用の路線というわけではなく、この花葉町から人々を山の反対側まで運ぶ客車も走っていたようだ。

義文は駅舎そばにEK9を駐車した。

待つてましたと言わんばかりに、第六駆逐隊が飛び出してく。

義文自身もエンジンを止めて杖を手に取り遅れて大地を踏んだ。

こうして近くでじっくりと花葉駅を見渡すと、微妙な違和感を覚える。

「……使われてない割には、綺麗なもんだな？」

されど解決しようのない違和感は、一旦胸の奥に仕舞い込んで、第六駆逐隊を見失わないよう視線を動かした。

少し目を離れた隙に迷子に……なんてことは幸いなく……。

彼女たちは思い思いの表情をしていた。

渦巻くのは、年相応の、知的好奇心。

未知の情景へ向けた、純粋な欲望。

暁と雷は駅舎の中と外を行ったり来たり、探検家気分で陽気に歩き回り、電は入口の両端辺りに飾られた花壇のブロックにちよこんと腰を下ろし、ほっこりと花々を眺めている。

そんな中、響だけは、特に何かを堪能するでもなく静かに駅舎を見上げていた。

義文が傍まで行くと、彼女は誰に聞かせるでもなく口を開く。

「こいつはどれほどの時間をこうしているんだろうね」

「……………」

それは、正確な時間を聞いているのではないと、瞬時に悟る。

「有機物にしろ無機物にしろ、時間の歩みと共にみんないつかは朽ち

果てて、やがては人々の記憶からも欠落していく……」

同じ人の手で造られた存在に、想いを馳せているのか、響の声色はどこか儚げだった。

彼女には感じるものがあるのだろうか。自分の人生を既に知っているからこそ、意思疎通さえ不可能な目の前の廃駅の、あるはずのない感情を……。

「そうして残されたのは無念だけ。都合よく生んでおいていらなくなったらポイ捨てなんて許容できるはずもないこいつらはやがて一つの怨念となり人類に宣戦布告。今、地球の未来を守るために集められた世界最強の司令官達が空前絶後の艦隊戦ドンパチに挑む、スターウォーズを凌駕するCGだらけの超アクションエンターテインメント。主役はもちろんこの私、響だよ。何が始まるかって？第三次大戦さ」

「台無しじゃねーか」

「ハラショー」

「この駅を見に来たのですかね？」

と、突然耳に届いた聞き覚えのない声に全員の視線が一点に集まる。

老眼鏡をかけ、バーテンダーのマスターのような格好をし、その手に小さく安っぽい如雨露を握った見知らぬ初老の男性が、柔和な笑顔で佇んでいた。

男性はまず呆気にとられている義文を見て、僅かに疑問符を浮かべながら言葉を紡ぐ。

「マニアの方が、あるいは駅の雰囲気に興味を持たれ何となくやってきたか、どっちかですかね？」

「……えと、どちらかと言えば後者ですけど、もしかしてこの駅の管理人さんですか？」

少々間を開けて彼が自重気味に言うと、

「ンフフ。隣にある、しがなマスターい喫茶店の店主ですよ」

悪戯っ子のように笑って答えた。

地元の人、だろうか……？

「入らないのですか、ホーム」

「！勝手に入っても大丈夫なんですか？廃線と言えど一応、鉄道会社の私有地なんじゃ？」

「……確かにそうですね。でもきつと構いませんよ。ンフフフ。かく言うわたくしも、頻繁に立ち入ってますから」

いろいろとグレーな気がしたが、自分たちもだつて廃線跡を辿っているのだから、入っても大丈夫というのなら是非甘えたい。

「まあ、そういうことなら」

何の躊躇いもなく駅構内に入るマスターの背中を追うように、義文たちは進入していく。

薄暗い駅の中は、乗車券販売の案内や時刻表は文字が削れ、照明も割れていた。しかし一見荒廃しているような雰囲気が目立つものの、細部は汚濁しているようには見えない。

「壊れているものが多いけど、中は綺麗なものね……貴方がキレイにしているの？」

暁が無遠慮に問う。子供ゆえの愚直な物言いだつたが、マスターは嫌な顔一つせず、にっこりと笑って答えた。

「はい。花葉駅には、少し思い入れがありましてね」

視線を虚空に向けて、何かを懐かしむように物思いにふけるマスター。

少しだけ駅舎内を眺めてから、ついにホームへと足を踏み入れる。当然、自動改札口などは無く、駅員が切符のやりくりをしていたのだと推測できた。

ホームは、田舎にありがちな横に細い典型的な島式の形をしていた。全長はせいぜい、三両編成の電車が余裕をもって収まるほどだ。

空と緑を一望できる素晴らしい景観である。

しかし何よりも目を引くものが、五人の眼前に広がっていた。

「「わあ……！」「」

「っ！」

四人が思わず声を上げ、釘付けになる。

普段は感情の起伏が薄い義文でさえ、息を呑んだ。

隣ではマスターが、静かに微笑む……まるで彼らの反応を予想していたかのように。

線路の反対側を埋め尽くすそれらは、一風に揺られ、音のないメロデーを奏でる。

どこまでも広がる青空とすべてを照り輝かせる太陽の下で。

かつて栄えていたであろうこの駅に、わざわざ口にする必要もない程似つかわしい。

——風光明媚

花畑が、そこにはあった……………。

時は少し遡り、執務室。

「そういえばあの方、足を悪くしていたようですが……提督は事情を把握していますか？」

榎人が作成した出撃記録書やら戦果報告書やらの提出書類で折り鶴を折っていた秘書艦が、不意にそんなことを聞いてきた。

「確かに知っているけど、気になるかい？」

本音を吐露するなら、秘書艦・加賀の行為は言葉を交わすまでもなくブチギレ案件であったが、それではスマートさに欠けるので平静を装って会話を続けることにする。

加賀は、『え？私何か悪いことしましたか？』と主張せんばかりのわざとらしさに塗れた、偽りの純朴を潜ませた瞳をして、ただこくりと首を縦に振った。

そんな女に本気で辟易しつつ、榎人は書類作業を一旦止めて、凝った肩を揉む。

他人を思うがままにコントロールすることを酒のつまみに生きてきた者としてのプライドが、やられっぱなしではいられないと憤る。

「……あいつの話なんて大したものじゃない。ま、聞きたいってことなら休憩がてら語ろうか。端的に言えば事故さ。ただちよつと状況が特殊だっただけで……。あれは確か、高校卒業間近の」

「昼食の時間なので出ます」

「……………」

榎人は決意した。あの阿婆擦れは必ず自分の手でその鉄仮面を恥辱に震わせると、そしてとりあえずは一週間補給抜きにすると……。

義文は秒を刻む少しの間、その場から動くことができなかつた。

色は、複数でカラフル、しかし紫の花を主として均等に色別に咲い

ている。

種類も、すべてが同じというわけではないにも関わらず統一感を崩していない。

誰もが目にする、テレビの中で紹介されてきた観光地の花々には一瞥さえすることがないというのに……。

それほどまでのものを自分は見ているのかと、一応の納得はするけれど。

やはり、体の芯まで震わせてくる圧倒的な存在感の花畑を現実のものと思えない気持ちの片隅でくすぶっている。

「おじいさん、近くで見てもいいのです!？」

「ええ、ええ。是非見ていって下さい」

マスターの許可が降りて、第六駆逐隊は一斉にホームから飛び降りた。

少女達は綺麗に着地して、錆びつき、雑草が顔を覗かせるレールを跨いで花畑へと入っていく……。

「これは、貴方が?」

「はい。随分前に、土地を持って余していた方から格安で譲渡して頂きました」

ようやく我に返った義文へ、マスターはにこやかに答えた。

再び花畑に目を向けると、瞳に映る無邪気な少女達はまるで甘い蜜を求めて花々にやってきた蝶のように駆け回っていた。

「あの娘たちは、艦娘さんですね」

「……その通りですが、よくわかりましたね?」

「この町は見ての通り過疎化が進んで、今や若い者はおりません。学舎もあるのは峠を越えた先の街ですからねえ。それにわたくしの知る限り彼女たちの制服は見かけないものでしたので、もしやと思ったのです……。しかし珍しいですねえ、艦娘さんを鎮守府の外で見かけたのは初めてですよ」

マスターは愉快そうに、花畑を駆ける第六駆逐隊を見ていた。

「実は彼女らは、休暇みたいな感じで……。俺は……。まあ保護者、みたいなもんです」

発言に気を付けるようには言われていないが、仮にも軍事組織関係者の依頼である。一般のマスターにどこまで話してよいかと考えるしまったせいで、歯切れの悪い返事になってしまったものの、「ソフフ。なるほどそうでしたか。それならば尚のこと、楽しんでもらえたようで何よりです」

と、幸い詮索することなく笑っていた。

——— そういえば、マスターはなぜ、こんな寂れた町で、こんなにも美しい花々を育てているのだろうか。

観光地ではないから、不特定多数の他人に見せる目的ではないということは明白だが……。

孤独を紛らわせるため？それとも単なる趣味？

(いや、そんなもんじゃないな)

あるいは……過去の記憶に連なる何か。

マスターは鳥式ホームの端に向かいおもむろに歩き出した。

義文は杖を付きながら後を追う。

すると、彼は歩きながら語り始めた。

「まだこの路線に汽車が走っていた学生の頃、妻にプロポーズした場所がここなんです」

それはとても唐突で、しかしながら義文の求める答えを明確に示しており、偶然の産物なのか、マスターが本物のエスパーなのか疑惑を持つほどだ。

「妻は花が大好きでしてね。それはもう傍から見れば呆れてしまうくらい。いくつになっても、花と戯れる姿は少女のようでした」

「それは、素敵な奥様ですね」

花を愛でる若き日の妻……言葉の通り、素敵な方なのだろう。マスターの声色は穏やかなままだったが、表情が歳不相応に若々しい……青春時代を懐かしんでいる顔をしていた。

「ですが、彼女にはやるべきことがあった。平たく言うなら、世界中の

人々を助ける使命です。結ばれた後も、妻は家にいることの方が少なく……最後に顔を合わせたのはかれこれ、三年は前になりましたよ
か」

かける言葉が、見つからなかった。

つまり彼は、愛した女性を孤独に待っているのだ。

いつ帰ってくるのかもわからない、心を通わせながらも傍にいない。

どれほど心が息苦しくなる日々か想像に難くない……。

ですが……と彼は置き紡ぐ。

「寂しくも、悲しくもありません。わたくしたちは、離れていようとも繋がっていますからね」

「え……？」

廃駅の端で足を止め、再び花畑を見ながら、マスターはそう言っ
て、意味深く微笑んでいた。

ほどなく、4人が戻ってくる。

「とつても綺麗だったわ！淑女の私にピッタリな場所ね！」

「へっ、1番子供みたいなのはしやぎ方をしてた奴がよく言うぜ」

「ちよっ、響やめなさいよそういう事言うの!?!」

ぐうううう……。

「あ……」

間拔けな音が聞こえた。

「おやおや、お腹が空いたようですね。どうですか、私の店で昼食でも」

義文がスマホを見ると、時刻は12時を回っていた。ここまで何も食べてないのだから、腹が減るのも無理はない。

「いいのですか、ご馳走になってもっ」

電が義文に言う。念のための確認だろう。

財布を出して中身を確認しようとするが、マスターに小銭チャックを開けようとする手を止められ、

「ここで出会ったのも何かの縁でしょう。代金は結構ですから」

「え、でも……いや、お願いします」

「んふふ」

本来なら遠慮したかったが、義文は今持ち合わせが心許ない。金銭的に厳しいことを考えると大いに助かるので、ご厚意に甘えることにした。

マスターは、もう何度目かになる微笑みを浮かべた……………。

花葉駅を出てすぐ脇にあったのは、昭和のレトロな雰囲気醸し出す小奇麗な喫茶店だった。ここがマスターの経営する店のようだ。

どうぞ、と手招きされて、義文を先頭に店内へ足を踏み入れた。

途端、強いコーヒーの香りが嗅覚を刺激し、赤色を主としたカラーリングが時代錯誤な狂気となって魅了する。

町に人が少なすぎるせい客は居らず、ガランとしており一抹の寂しさを覚えた。

第六駆逐隊は、窓から廃線跡と島式ホームが見える隅の席を選び腰掛け、義文はそばのカウンター席に。

「どれにしようかしら」

「マスター、珈琲一杯、ブラックで」

「響ちゃん、ブラック飲めるのです?」

「前に司令官のを分けてもらったことがある」

「そ、それなら一番お姉さんである暁もブラックで!」

「無理しなくていいのよ暁」

「そうなのです。暁ちゃんが一番飲みたいのはアイスココアだつてことみんなわかっているのです」

「マスター、彼女にはお子様ランチを」

「人を子ども扱いするなあああああ!!!」

とまあそんなやりとりの末に結局暁はブラックに挑戦したものの、見事惨敗。

暁と雷はハムと卵とレタスを使ったサンドイッチとアイスココア、響は砂糖のかかったデニムパンとブラック珈琲、電は小ぶりのオムライスとオレンジジュース。

義文はシユガーを加えた珈琲と、バターロールパン1つ。

代金は取らないと言ってくれたが、いくらなんでも頼みすぎて悪いんじゃないかと、カウンターに立つマスターに目を見つめると、自分用と思われるポットの珈琲を高く持ち上げカップとの間隔を開けると、奇妙な注ぎ方をしていたことに困惑するも、相変わらず彼はここにこしていた。

そして、花葉駅到着から、およそ一時間後……。

「ご馳走様でした」

「お気に召したようで、何よりです」

マスターとの邂逅は、良いものを残したようだ。義文たちは、ここより先へ向かう。

「お昼ご飯とーっても美味しかったわ！今度また食べに来てもいいかしらっ。」

「もちろん、いつでも大歓迎ですよ」

4人が一足先に車に乗り込んだ。

「それでは、俺達はこれで」

次いで運転席に向かおうとする義文を、マスターは呼び止めた。

マスターは彼の杖をつく右足をちらりと見て、また視線を戻し言う。

「見える世界は広い……故に、見失ってしまう景色もたくさんあります。ですが、それは決して消えてしまったわけではないことを、在り続けていることを、忘れないでくださいね」

「……………」

「ソフフ。老人の戯言ですから、深く気になさらず」

「……珈琲、美味しかったです」

義文は頭を下げ、車を発進させた。

花葉駅とマスターの姿は視界から消えていき、少し寂しい気持ち
が、車内を支配する。

しばしの沈黙の後、電がふと口を開いた。

「駅のお花畑、紫のアネモネが一番多く咲いていたのです」

「それがどうかしたの、電？」

「紫のアネモネの花言葉は、『あなたを信じて待つ』というものなので
す」

何十年という時と共に流れていく中で、あの人が愛する者と時間を
共にいられたのはどれほどなのだろう。きつと世間一般の者達と比
較すれば、とても少ないはずだ。

それでもマスターの愛は枯れ果てることなく心に咲き続
けていた。

彼は言った。自分たちは、離れていても繋がっていると……。

恐らく、いや間違いなく、あの花畑の駅はその証なのだ。

「あのおじいさんは、誰かを待っているのかもしれないのです」

マスターのことを、少女達は知らない。

けれどもきつと、彼の幸せを願う気持ちだけは同じだろう。

義文は大きなあくびをしながら、EK9を走らせる。

廃駅での新鮮な出会いを経て、再び彼らの廃線跡を辿る旅が続く。

花壇に咲いた一本のアネモネが、静かに揺れていた……………。

第3話 廃駅とマスター（後編） 終

マスターと別れて、15分程。

町の出入り口に差し掛かるにつれて建物は数を減らし、再びしっかりと線路跡を確認できるようになってきた。

ちなみに助手席には響が座っている。喫茶店を出る直前、ローテーション方式で4人を入れ替える約束をしていたからだ。

「山がどんどん大きくなっていくわ！あんなに小さかったのに！」

「鎮守府から眺めていた時とは大違いなのです！」

「当然でしょ、えんきんほーよ、えんきんほー！」

後ろではしやぐ3人をよそに、響が義文に話しかける。

「そういえばこのドライブ、山をこえて、線路の終わりまで行くのかい？」

「そいつは無理だ。今日はそうだな……山のふもとまでだな」

「えー！」

「俺だってお前達を鎮守府に送り届けたらまたここ通って家まで帰らなきゃならんのだよ。結構疲れるんだぞ、運転手ってのは……」

「諦めたらそこで試合終了よ？」

「諦めたんじゃねえよ、行きたくねえつつつてんの。それに、楨人の奴からもあまり遅くならないようにしてくれって釘刺されてんだ。恨むんなら自分らのところの提督を恨め」

「ケチ！貧乏！ニート！年金くらい払え！」

「う、うるせえ！つか、年金払えてないってなんで知って……」

「ん？（暗黒提督スマイル）」

「……………あいつ帰ったら殺す」

「！あれなに？」

響が座席から身を乗り出して、指さす。

あれは、人々が交通機関を利用する上で線路を横断する際、安全の確保をするためになくはならない……。

「——踏切か」

EK9の速度を落とし、道脇に駐車する。

ナビを確認すると、丁度、花葉町の出口のようだ。

義文と艦娘たちは車から降りてボロボロの踏切周辺を探索し始めた。

相変わらず線路には手付かずの雑草が好き放題伸びて、レールも錆びている。

踏切そのものが廃線当時から放置されているためか、黄色と黒色の縞模様の自動遮断機は、マスターの手入れがなされていた廃駅とは打って変わって汚れに飾られていた。

この先の線路は緩い傾斜に乗って、山の方まで伸びているようだ。「踏切って何なの？」

「そうか、良く知らないんだなお前らは。列車が通過するってことをこの道を利用する人たちに点滅と音で警告して、通行を規制する装置だ」

と、一般的な認識を説明してみたはいいがすべてが正しいかなんてわからないので、スマホでYouTubeを開いて実際に踏切が動作している映像を見せてみる。

義文には見慣れた光景であるが、初見には新鮮で魅力的な映像なのだろう。彼のスマホに釘付けになって離そうとしない……。

とりあえずスマホは彼女たちに預け、杖に体重をかけているために

歩行すら常人より疲労を蓄積してしまう義文は質素な岩の上に腰掛け、何をするでもなくボーっと景色を眺め始める。

(……………)

体感から30秒くらい経った頃だろうか……穏やかであった空間に、少しずつ人工的な振動と音が近づいてくることに気が付いた。

エキゾーストノートだ。

やがて姿を現したのは、一台の自動車。結構なスピードで踏切の反対側……山の方面からやってくる。

第六駆逐隊も音に釣られ、動画を観るのを止めてそちらに注目していた。

やがて踏切をこえ義文のEK9を通り過ぎた辺りで停車した車は、派手に着飾ったスポーツカーのようだ。

綺麗な水色に塗装された車には、ウイングが付いたりカーボン製ボンネットだったりときさまざまな手が加えられている。

すると、運転手が外にドアを開けて降りてきた。

まだまだ垢抜けない雰囲気、若い女性だった。

「わー！EK9だー！！！」

女性は子供のように瞳を輝かせながら、興奮隠さず義文の車を観察し始めた。

「……………」

しばらく呆気に取られていたが、所有物をジロジロ見続けられている事実を理解して立ち上がると、ゆっくり少女に近づいていく。

改めて見ると、歳は義文とそう変わらない感じだ。目元はくつきりしていて、快活なイメージを持たせる顔立ちに、柄の入った半袖のTシャツにキュロットスカートという恰好。

そのすらりとしたシルエットは、アスリートと比べても遜色ないだろう。

「あ、ごめんなさい！勝手にじろじろと……」

「いや、別に構わんが……」

初対面でいきなりフレンドリーな話し方をする少女に若干戸惑った、次の瞬間……。

「でも、ほんとイイ車だよねえ。最近のも悪くは無いんだけど、一昔前のちよつと尖ったデザインがあたしは好みかなー」

割り込む余地もなく、女性は嬉々としてペラペラ語りだした。

なるほど、と義文は察する。目の前の女性は車のことになると周囲が見えなくなる人種だ……。

「……ハッ!? またやつちやつたあ。すみません、勝手にしやべり倒しちゃつて」

「い、いえ……お気になさらず」

今度は過剰に落ち込む女性。随分と喜怒哀楽がはっきりしている天然娘だ。自分とは正反対な性格をしている。

(……あいつみたいで、なんかヘンな奴)

その姿を見て、義文はある記憶を手繰る。

相良義文の友人と呼べる人間の1人に、スポーツカーに乗って悪路を走行する競技に精を出す者がいることを思い出した。

義文がEK9を購入したのも、実はその人物の影響を受けてのことだ。

「あ、まだ名前、名乗ってなかったね」

「それはお互い様かな」

「あたしは根城凜音^{ねじろりんね}。見ての通り走るのが趣味の普通の女子大生！」

「……相良義文だ」

車での走行が趣味の女性はあまり普通ではない気もするが……と思いつつ、義文は名乗り返した。

そう言えば、あいつと最後に会話したのも、こんなボロボロの踏切のそばだった……。